コラム
人・動物・動物園

ＳＤＧｓと動物園

小　松　　守
（秋田市大森山動物園 園長）

子どもの頃に抱いた梅雨から夏にかけての印象は、しとしと降る雨と紫陽花、そこで見つけたデンデン虫（カタツムリ）、梅雨明けの夏空でカッと照り付ける太陽、そして夏祭りだった。記憶はあいまいだが、雨や暑さに「強烈さ」の印象は少なかった。５～60年を経て、それらは変化している。秋田はこの夏も猛暑日が続き、降る雨は熱帯のスコールのようだ。

西日本は連日の豪雨に見舞われたが、それをもたらした雲の衛星写真をＴＶで見た。ヒマラヤから日本列島まで幅広く何千キロも連続する地球規模の空気の流れには恐怖さえ覚えた。異常気象が続けば日本列島はひとたまりもない。

地球温暖化は豪雨や干ばつ、熱波など異常気象を引き起こし、森林火災、極地の海氷や氷河の融解などにもつながり、自然生態系にも影響を及ぼしている。動植物の絶滅、生物多様性の低下を招き、食糧生産への打撃も心配される。バランスを崩した生態系と新興感染症の発生は無関係ではない。地球環境は彼方こちらが傷つき始め、環境問題は深刻だ。

国連は環境問題含め、世界中の人々が生きてゆくためには、一層の国際連携と一人ひとりの参加が不可欠だと考え、「誰ひとり置き去りにしない世界をめざして」をスローガンに、「持続可能な開発のための目標：SDGs」を打ち出した。活動に伴う大きな経済効果も試算され、経済界や民間企業の参加も増えているようだ。

ＳＤＧｓの幅は広く17もの目標が示され、社会、経済、環境分野に大分類される。間口は広く多様な活動と関わりが可能であるが、日本の動物園界はなぜかＳＤＧｓを意識してこなかった。

しかし、身近な地域含め、世界中で異常気象など地球環境悪化が加速化する今、動物園はもっともっと環境問題に積極的に関与してもいいように思えてくる。元来、動物園は野生動物を通じて自然環境との関わりを持っていた。

ＳＤＧｓと動物園との関わりを考えてみた。

一般の人に関わりを問うた場合、反応は二分されそうだ。一つは、「貧困や飢餓、ジェンダー、持続可能な開発と動物園、どう関係するの？」と違和感を抱く人、一つは、「ＳＤＧｓには生物多様性の保全も入っていたよね、自然環境と関係ある動物園の参加はいいじゃない」と理解を示す反応だ。前者はＳＤＧｓの社会や経済分野でとらえた人、後者は動物園を環境分野でＳＤＧｓとの関係性を考えた人だ。確かに動物園には得意、不得意の分野はありそうだ。

大森山動物園の活動は様々だが、ＳＤＧｓを意識したことはなかった。動物の展示を続けるためトラやユキヒョウ、あるいはイヌワシなどの特に希少種の繁殖に力を注いできた。動物園はおのずと希少動物の保存をする場になっていたが、これはＳＤＧｓの目標の一つ「陸の豊かさを守る」という環境保全でもある。

また、目の前で本物を実感できる動物園は、動物を知り、いのちを感じる場を提供している。動物への関心は、やがて動物が暮らす野生へと

想いが広がり、環境理解、さらには保全にも結びついてゆく。動物園から遠く離れた野生や自然に想像を広げ、対応を探ることはＳＤＧｓを進めてゆくうえでとても大事だ。

日本のイヌワシは外国産動物と異なり、私達が少し足を延ばせば体感できる森林や山に生息する鳥だ。生態や減少の様子、要因を知ることで、生息地の自然環境や森林産業との関わりを知る機会にもなり、人、動物、自然のつながりを考えるきっかけにもなるだろう。スター的存在ではないイヌワシも、間近で羽ばたく姿に出会えれば、人は風を感じ、山の自然に誘われる。

大森山が取り組んでいるゾウなど草食動物の糞でつくった堆肥を活かした作物栽培の体験などは、資源循環の大切さを考えてみる貴重な学習の機会ともなっている。これら動物園の展示や体験は生涯学習の場の提供であり、環境教育の一環にもなっている。まさにＳＤＧｓの大事な目標に向かっている。

動物園はお気に入りの動物と展示を通じて出会い、そこからその動物が生きる野生に想像をも膨らませながら、その環境を考える機会を提供できたら、環境教育として素晴らしい場になるだろう。ＳＤＧｓが掲げる遠い世界の人々に想いを広げ、理解することで助け合いや援助を成立させてゆこうという考えに通じるものがある。

もう一つ動物園とＳＤＧｓとの関わりを考えてみた。幅広い17目標は実に多様だが、それぞれを掘り下げ、突き詰めてみると共通した大事なものがあるように思う。それは共に存在し、共に生きるという「共存」と「共生」という考えである。多様な動物が生活し、いろいろな思いのお客様がおいでになる動物園は、人、動物、自然を考える場ともなり、ＳＤＧｓの根底に見えてくる「共存」「共生」という地球倫理的な考えとどこか似ているところがある。

持続可能な「開発」という言葉に「人間が生きるためのもの」という人間中心的な意識を感じなくもない。だからと言って、野生や自然だけに目を向けた考えと二項対立的に捉えてしまう必要もない。地球（自然）、生き物、人は共に存在しながら、バランスよく生きてきたという地球史レベル的な思考で時には考えることも必要である。

動物園でＳＤＧｓを考える場合、野生動物の保全という領域にこだわりがちだが、多様な生き物を相手にし、その生き方も含め大切にしてきた動物園は、地球も、生き物（動物）も、人も平等な存在であることを意識できる空間として見ることもできる。それはＳＤＧｓの根幹、多様性を認め、皆が幸せであって欲しいという概念と重なるように思えてくる。

子どもから大人まで多くの人が集まり、気軽に楽しめる動物園は、お気に入りの動物と同じレベルで対話できる場でもある。自然や動物の世界に時に自分を入れ込んでみることで、自然や動物への関心の高まり、知ることにつながる。こうした思いは人の世界にも通じる普遍的な意識であり、言い換えると相手と同じ立場に立ってみることだ。

大森山動物園が掲げるテーマ「動物と語らう森」は、おとぎの世界のように思う人もいるかもしれないが、人も動物も共に生きる存在であることを考えて欲しいという願いが込められている。動物園は楽しみながらSDGsの根幹にある多様性を認め（共存）、共に生きる（共生）という精神性を感じ取れる場かもしれない。

身の回りに起きている自然環境の悪化や社会変化などに、関心を持ち、知り、想いを巡らし、それへの対応を皆で考え、行動することが、今求められているように思う。動物園がそこに結びつくきっかけになれたら嬉しいのだが。